

ホタルの里 ひっそりと

栄区の瀬上沢を歩く

368万人が暮らす横浜に、自生のホタルが舞う水辺がある。JR港南台駅から歩いて20分ほど。横浜市栄区上郷町の「瀬上沢」は緑の別天地だ。6月になるとホタルを見ようと人が押し寄せ、ホタルが脅かされる事態にもなっている。

(織井優佳)



闇の中を飛ぶ瀬上沢のホタル 2008年6月、夢生陽(むう・あき)さん撮影

今年9日の朝、同町にある

県立横浜栄高校にどう見ても高校生ではない人たちが集まった。リュックを背負った白髪のおじさん、おばさん、子連れの若いお母さんも。そろって高校の裏手に広がる雑木林に向かった。

一団は「瀬上沢文化遺産研究会」が隔月で開催する「カイドツアー」の参加者。鑑蔵片手の寺本浩会長(66)、高村鈴子さん(61)らの案内で、この日は21人が、せせらぎの音に交じってカエルの声が響き、野鳥がさえずる木陰を歩いた。

地元で農業をやってきた角田鹿蔵さん(69)＝手前＝は瀬上沢の主のような存在。出会えばあれこれ教えてくれる＝横浜市栄区



開発危機 幾度も乗り越え

瀬上沢は、過去に何度も開発計画の対象になりながら、かろうじて守られてきた。

バブル期の1990年代には、業者が開発許可申請を出したところで倒産。2005年に一帯33畝の休耕田や山林を、約100人の地権者から東急建設がとりまとめて造成し、宅地やショッピングセンターをつくる計画が明らかになった。

これを機にできた多くの市民グループは、それぞれに保全運動を展開。その一つ「上郷開発から緑地を守る署名の会」は、9万人余りの反対署名を集めた。結局、横浜市都市計画提案評価委員会は08

年7月に計画を否決した。

これ以降、目立った活動を休止したグループも多いが、東急建設側はその後「規模を縮小しても開発したい」と市に伝え、現在も見直し計画に向け課題を整理中という。

そこで08年10月、市民の寄付を募って緑地全体を買い取ろうと、NPO法人「ホタルのふるさと瀬上沢基金」(角田東一理事長)が設立された。すでに約300万円の寄付を集めたが、目標額とは2けた違う。危機を何度もくぐり抜けた貴重な自然を守るための模索が続いている。

広がる緑の自然 お願い「静かに」昼間来て

円海山(1533)からのわき水が小川となって流れ、5分も歩けば市が整備した「瀬上市民の森」。目と鼻の先で車が行き交っているとは信じられない、昔話のような風景が広がる。

円海山(1533)からのわき水が小川となって流れ、5分も歩けば市が整備した「瀬上市民の森」。目と鼻の先で車が行き交っているとは信じられない、昔話のような風景が広がる。

なす(い)自然が横浜にあるなんて。川底のあちこちにある妙な模様は、黒い巻き貝「カワニナ」がはった跡。ここ瀬上沢は、そのカワニナを食べるホタルの横浜市最大の生息地なのだ。

「横浜ほたるの会」の丸茂高会長(70)によれば、瀬上沢には、流れに住むゲンジボタルと止水域に住むヘイケボタルの両方がいる。例年6月にゲンジ、1カ月後にはヘイケが飛び始める。ドクダミの白い花が咲く頃が観察時期の目安という。このほか、カタツムリ類を食べる陸生のクロマドボタル、ムネクリイロボタル、オバボタルの3種も確認されている。

神奈川区から息子(4)と参加した奥村明日美さん(33)は珍しそうに見回した。「こん

「丸茂さん」という瀬上沢に、15年ほど前からホタル

「怖いほどひとけがなかった」(丸茂さん)という瀬上沢に、15年ほど前からホタル

「怖いほどひとけがなかった」(丸茂さん)という瀬上沢に、15年ほど前からホタル

を見に来る人が増えた。貴重な自然を損なう人もいるのが、保全ボランティア団体の「瀬上沢とホタルを守る会」の悩みだ。

同会が掲げる「ホタルからお願い」は「連れて帰らないで」「ライトをつけないで」「道から外れないで」「くわえタバコはだめ」「しーっ、しずかに」「路上駐車厳禁」

ホタルの数より人の方が多い状況で「一匹ぐらい」は通らない。懐中電灯やカメラのストロボ、携帯電話のバックライトは、ほのかな光の明滅で雄と雌が呼び合うホタルには致命的な妨害。道を外れば、土の中で羽化目前のさなぎが踏みつぶされる。

